

一 次の文章を読み以下の問いに答えなさい。

①運動会のプログラムは進んでいく。

上級生のかけっこ、玉入れ、ダンス、組みアタイソウ・・・最初は運動会の様子を少しだけのぞいてひきあげるつもりだった菜穂も、( a ) 応援にイムチユウになつた靖彦を見てみると、「もう帰ろうよ」とは言えなくなつた。順位や勝ち負けを決める種目のときには、靖彦は必ず、負けているほうやびりつけつの子を応援している。

リーグ戦の綱引きで全戦全敗に終わった六年生のチームが、観客席の前を小走りに通つてウタイジヨウ門からひきあげる。上級生は勝ち負けに敏感になるのだろうか。みんな

( b ) 肩を落とし、悔しそうな顔をして走っていった。

そんな子どもたちを、靖彦は「いいんだいいんだ、よくがんばったぞ」と拍手で見送つた。「まだまだ、まだまだあるぞ」とも言った。

言葉はすべて、涼しい秋風に乗って自分自身に戻ってくる。

そして、風に乗って空に舞い上がった小さな声は、隣町の中学校のグラウンドにいるはずの翔太にも届くといいな」と、菜穂は思う。

「ねえ・・・」

「うん？」

「努力してもエ鞆<sup>たぶ</sup>われないことって、やっぱりあるかもね、②現実<sup>じやうじつ</sup>って」

「・・・だよな」

「でも、終わりじゃないよね。( c ) 一回<sup>いちど</sup>負けても、まだ終わりじゃないよね」

③怪訝<sup>あやま</sup>そうな顔をした靖彦は、眉<sup>まゆ</sup>を寄せ、頬<sup>ほお</sup>を微妙な角度にゆるめてから、「そうだよ」と言った。「何回<sup>なんど</sup>負けても、終わりじゃないよ、まだ」

「うん、それにさ、勝ち負けって関係ないよね、そんなのどうでもいいよね」

靖彦はうなずかなかつた。少し考えてから、「でも」と言った。「勝ち負けは大事だよ、やっぱり」

菜穂が返す言葉に ( d ) ら、靖彦はもう一度「でも・・・」と言いかけて、少し黙り込んで、まあいいや、と笑つた。

菜穂もそれ以上はなにも言わなかつた。

グラウンドにまた音楽が流れはじめた。『クシコスの郵便馬車』―次のプログラムは、三年生のかけっこだった。

子どもたちが、緊張した④面持<sup>おもて</sup>ちで入場門をくぐり、スタートラインへ向かう。観客席は手拍子で迎える。運動会を観ているひとは、ほんとうに、みんな優しい。自分の子どもではなくても、顔見知りの子どもではなくても、とにかくおとながみんな子どものみんなを応援している。

⑤勝ち負けがあるから、だろうか。

子どもたちは、これからの長い人生を、勝つたり負けたりを繰り返して生きていく。運動会のようなさつぱりした勝負は、そう多くはAないだろう。やり場のBない悔<sup>く</sup>しさや、後ろめたさを背負つた喜びを味わうことも、きつとあるはずだ。

おとなたちはそれを知っているから、運動会の子どもたちにせいっぱいの拍手をするのだろうか。「がんばれ！」の声援を、半分は自分自身のためにおくりつつづけるのだろうか。

最初の組がスタートラインにつく。六人の男子がそろってクラウチングスタートの体勢をとる。スタートラインが横一線ということだって、ほんとうはめつたにCないんだ、と菜穂は思う。最初から差がついたまま走りださなければならDないことは、世の中にたくさんある。でも、その代わりゴールだって同じじゃないから、一人ずつ違うんだから―それを信じているから、⑥おあいこなんだよ、と笑つてうなずく。

「どうした？」

靖彦にきかれて、「なんでもない」とお応え、六人の中の誰でもEない誰かに「がんばれーっ」と声をかけた。

スターターの先生がピストルを高々と掲げた。

「位置について、よーい・・・」

号砲が、青い空に吸い込まれた。

(重松清『よーい、どん!』より)

問一 二重線部ア〜オのカタカナは漢字に改め、漢字は読みを答えなさい。

問二 傍線部①を単語に分けるといくつになりますか。数字で答えなさい。

問三 波線部A〜Eの「ない」のうち異なるものを一つ選びなさい。

問四 ( a ) ( d ) に入る適語を次から一つ選びなさい。

- a ア すっかり イ まったく ウ だんだん エ とうとう  
b ア こっそりと イ どっしりと ウ ばたんと エ がっくりと  
c ア つまり イ でも ウ やはり エ たとえ  
d ア つまっていた イ にごしていた ウ 触れていた エ 選んでいた

問五 傍線部②「現実」とほぼ同じ内容を表す言葉を文中より三字で抜き出さない。

問六 傍線部③④の意味として適切なものを次から一つ選びなさい。

- ③怪訝 そうな ア 不機嫌な イ 不安げな ウ 不審げな エ 不自然な  
④面持ち ア 雰囲気 イ 状況 ウ 顔つき エ 態度

問七 傍線部⑤「勝ち負け」について登場人物である、上級生・菜穂・靖彦はどのように考えて(感じて)いるか。それぞれ文中より五字以内で抜き出さない。

問八 傍線部⑥「おあいこ」と菜穂が考える点について説明した次の文の( )に入る適語を、それぞれ文中より抜き出して答えなさい。

世の中には、勝負がさっぱりした( ① )のようにスタートが( ② )ということはあるが、その代わり( ④ )も同じではなく、一人ずつ違っている点があるが「おあいこ」である。

\*①・②・④は三字、③は五字である。

一 次の文章を読み以下の問いに答えなさい。

日本語の未来ということを考えると、共通語がどんどん普及していくのはけっこうなところかもしれないが、困ったこともある。今後は、方言がどんどん衰退していつてしまいうだからだ。共通語というものが、方言を放逐してしまつて、我々の話す言葉が共通語だけになつてしまうことが、果たしていいことなのだろうか。これは大いに考えなければいけない。というのは、共通語にはいろいろな問題があるからだ。共通語というものは、大抵東京の言葉が基本になつている。東京の言葉が万能ならば文句はないのだが、そうとも言えない。東京の言葉というのは、東京という都会に住んでいる人間の間で生まれた言葉であるために、どうしてもきめ細かい表現が足りないのである。

日本中で雪が最も降ると言われる新潟県へ行くと、雪に関する語彙が非常に発達している。雪の生活が非常に長い地方では、雪の降り方を見ていろいろな名前をつけている。こういった言葉は、その地方になくしてはならないものであり、いくら共通語が盛んになつたからといって、これをなくしてしまうことはできない。またなくしてはいけない貴重な言葉である。南の方に行くと、例えば鹿児島あたりは、カツオの漁が盛んなのでカツオにいろいろな名前がついている。

こういうことから、東京という都会に発達した言葉だけでは、東京以外の人の生活を言い表すための言葉は当然足りなくなつてしまう。共通語というものは、もつともつと方言から栄養分を取り入れて、豊かなものにしなければいけないということになる。

今日、共通語が、日本の代表にふさわしいものになるためには、地方の言葉から豊富な言葉を取り入れる必要があるように、私は思う。それがすばらしい日本語を作つていくための土台になつていくだろう。

(金田一晴彦『日本語を反省してみませんか』より)

注 放逐(ほうちく)・・・追い払うこと。

語彙(ごい)・・・ある特定の範囲で用いられる単語の集まり。

問 日本語をすばらしいものにするためにどうすることが必要だと筆者は考えていますか。八十字以内で答えなさい。必ず「共通語」「方言」「表現」「言葉」「生活」という語を用いること。(用いる順序は問いません。)